

戦国期―織豊政権期におけるマスキュリニティーの発現形態とその観念・影響

田 端 泰 子

はじめに

本稿では日本中世後期におけるマスキュリニティー（男性性）の表出形態はどのようなものであったのか、またその男性性は社会のなかでどのような評価を受けていたのか、またその發揮された男性性が社会に影響を与えたとすればどのような影響を与えたのか、を考察する。

マスキュリニティーは戦国大名やその直後の統一政権期の信長・秀吉の行動や容姿に顕現すると思う。そこで織田信長の一生を容姿の変化をキーワードに捉え、その変遷を辿り、その容姿の変化を信長政権肯定者がどのように評価していたか、信長の青年期の様相に批判的な重臣や他の戦国大名の重臣クラスが、信長や戦国大名一般、それに女性をどのように評していたのかを対比しつつ考察し、次いで信長死後秀吉が天下人となると、秀吉の男性性はどのように表現され、秀吉はそ

の男性性をどのように利用しようとしたのかを考える。このことにより、当該期のマスキュリニティーの発現形態とその社会的評価、またその影響について考えてみたい。

一 織田信長の容姿の変化に見るマスキュリニティー

1 青年期の容姿とその意義

織田信長は天文三年（一五三四）尾張に生まれた。信長の父織田信秀は、尾張下四郡を領していた織田大和守に仕える三奉行のうちの一人であった。信秀の家は「代々、武篇の家なり」と言われた武士の家であった。織田信秀は勝幡に居城していた。よって信長の誕生の場は勝幡城であろうと思われる。信長の幼名は「吉法師」で、十三歳で元服し、信長と名乗る。元服以前に父が新たに造った那古野（名古屋）の城

を譲られている。父信秀は古渡に新城を造りここへ移ったので、那古野の城を吉法師は林、平手、青山、内藤らの家臣たちと守り、自らは城主として領民に臨むことになった。信長は右の通り、元服以前の段階で城持ちになっていることが注目される。林らの四人の家臣は「長」と記されている家老であり、平手は「台所賄」⁽²⁾も命じられていたことから見ると、平手は、那古野城で財政を預かる家老であったことが判明する。四人の家老の支援を受けたとはいえ、元服以前に城持ちの武將になっていることからみて、信長は少年時代から非凡な才能をもっていることを、家族も家臣達からも認められていたことが推測できる。

信長の元服は十三歳であるから、天文十五年（一五四六）に父信秀の古渡の城で元服式が行われ、例の四人の家老が御供をつとめたことになる。翌年十四歳の年、信長は「御武者始」を経験する。初陣のことである。この時平手が後見し、信長は「紅筋の頭巾、羽織」に「馬鎧」を装備して、今川領の吉良の大浜を攻め、放火して、次の日に那古野へ帰陣するというかたちで合戦を初体験している。⁽³⁾このように初陣の衣服は羽織に紅の縞模様の頭巾という、目立つ若武者姿であったことがわかる。

元服以後の青年時代の信長は「大うつけ」と呼ばれる異相であったことはよく知られている。着物は湯帷子^{ゆかたびら}（ゆかた）を着していて、その袖をはずし、袴は「半袴」（くるぶしまでの長さの括りのない袴）を着け、腰には火打ち袋など色々なものをぶら下げ、髪は茶筌髷に結い、紅と萌葱の糸で巻いて結っており、太刀は朱鞘のものを差すというありさ

まで、ここでも「朱武者」⁽⁴⁾と記されるように、赤や朱の目立つ出で立ちであったことがわかる。

武士の平服といわれる直垂・袴を着ず、下着に使われる帷子を着て、派手で目立つ服装を故意に装っていることがわかる。

また信長の「形儀」^{けいぎ}と呼ばれる行儀は、これまた常人と異なっており、町を通る時には人目を憚ることなく、栗・柿・瓜をかぶり食いながら、あるいは餅をはおびりながら歩くのだが、常に人に寄りかかったり、人の肩にぶら下がって歩く始末で、ともに歩くことはなかったようである。

信長が日常、武士の正装をしていなかった理由を考えてみよう。青年期の信長は馬の稽古を朝夕しており、三月から九月までは水練をしていたという。その他の「遊び」はしなかったとも記される。⁽⁵⁾そのほか市川大介に弓を習い、橋本一巴に鉄砲を習い、平田三位から兵法を学ぶ以外に鷹狩りを行っている。こうした信長の日常生活からみて、正装を好まなかった理由がよくわかる。武芸や兵法の修練こそが青年期の信長の関心事であったと考える。

このような信長の姿・行動に対して『信長公記』は世間が「大うつけ」と評したと記しており、その理由をそのころは「世間公道なる折節」⁽⁶⁾であったためであると述べる。信長青年期のうち濃姫と婚姻を遂げた天文十七年（一五四八）（信長十五歳のころは、織田信秀は今川義元と反目し、この年三月には小豆坂の戦いで勝利するなど戦国合戦の真最中であつた。そのため室町幕府が健全な時代とは様相を異にし始めていたが、京にいた足利義晴の権威はまだ二年後のその死まで健在であ

ったので、世間では「公道なる折節」との意識が強く、それからはずれた信長の異相は「うつけ」と評されたのであろう。

翌天文十八年三月三日織田信秀が亡くなる。信長、信行兄弟は家老衆と共に万松寺で父親の弔いを行う。そのとき弟信行は「折目高なる肩衣、袴」を着て、威儀を正していたのに対し、信長は長束の大刀と脇差を縄で巻き、髪は茶筌に巻き立て、袴ははずし、仏前に進み出て、抹香を「くはつ」とつかみ、仏前へ投げ懸けて帰っている⁽⁷⁾。

これを見た参列者たちは「例の大うつけよ」ととりどりに評判したが、その中にいた筑紫からきた客僧だけが「あれこそは国は持つ人よ⁽⁸⁾」といったという。父の死の直後まで信長は異相を通していたことになる。

このように葬儀の際まで異相を続けているのを悲しんだ家老の平手政秀は「信長公実目に御座なき様体⁽⁹⁾」を悔やみ、お守りしてもその甲斐がないとして、自害したとされる。この自害は信長の家老としての政秀の本心からの自害であったのかどうかについて以前考察したことがある⁽¹⁰⁾。その考察の結果、平手政秀は信長の元服以前からの家老で、父親から少年信長に付けられた四人の家老衆の内の一人であるばかりでなく、織田家の財政を預かる家老随一ともいえる家臣であったことを述べた。つまり少年信長の養育と後見役を期待され、また財政面を任された家老であったことになる。それに付け加えて、信長が斎藤道三の娘「婦蝶」を妻に迎えたのは、「平手中務(政秀)の才覚」であったと『信長公記』は記すことから、平手は信長にとっては重臣中の重臣であって、斎藤道三と織田家の間のパイプ役を務めた人物であ

ることが判明する。自害直前に政秀の三子のうち、惣領子息五郎右衛門が持っていた駿馬を信長がはしがり、それに対して子息は「自分は武者だから」と断ったことで、主従不和になったと『信長公記』には記されるが、これだけのことなら政秀が自害する理由にはならないだろう。筆者は、政秀の自害の大きな理由として、斎藤道三との会見を控えて、信長はうつけの姿をさらすだろうから、そのことによって近隣諸大名を油断させるといふ戦略に信憑性を与えるために、家老としての自分の命を懸けた、と考えている。

平手の読み通り、斎藤道三との尾張中島郡富田の正徳寺での会見に、信長は髪は茶筌で萌葱の平打で巻き、湯帷子の袖をはずし、熨斗付き大刀・脇差はみご縄(稲穂の心でなつた縄)で巻かせ、太い苧麻の縄で腕抜きを作り巻かせており、腰の周りは「猿つかひの様に」燈袋やひょうたんを七つも八つも付け、袴は虎皮・豹皮でつくられている、という出で立ちで現れた。

斎藤道三方は、信長は「実目になき人」だと言われているので仰天させ、嘲笑してやろうと、古老の者七、八百人に、「折目高なる肩衣、袴、衣装」で正装させて、御堂の縁に並び居させ、道三は町末の小屋に隠れていた。そこへやってきたのが異相の信長であったが、その時信長は「御伴衆」を七・八百も連れてきており、その人々に朱鎗五百本・弓鉄砲五百挺を持たせていた。そしてただちに「屏風引き廻し」髪を結い、「いつ染め置かれたのか知人なき」長袴を着て、これも「人に知らせず拵え」おかれた小刀を挿して現れた。

これを見て道三の家中衆は「さては、此の比、たわけを態と御作候

よ」と「肝を消」したという。⁽¹³⁾ 信長の異相はやはり他の戦国大名を油断させるための作為であつたことが判明する。よつて平手の自害は、信長の作為に信憑性を与え続けるための、命をかけてのご奉公であつたといえる。

道三とその婿信長は、「湯付け(湯漬け)」「御盃」という形式を踏んだ会見をしたあと、道三は信長を見送り、帰路に「無念なことだが、自分の子供はきつとたわけ(信長のこと)の門外に馬を繋ぐことになる」といつている。⁽¹⁴⁾ 「馬を繋ぐ」とは家臣となることを意味する。それ以後道三の前で信長のことを「たわけ」と呼ぶ人はなくなつたとされる。

道三はこの後信長を「すさまじき男」⁽¹⁵⁾とも表現しており、自分の子ども達も信長の家臣となるに違いないと予見したほど、信長のほんとうの能力、怖さを見抜いていた。すさまじいという表現は、信長の平生の行動や思惑が、既成観念・常識にとられない点から出たものであつたのだろう。信長においては、常識や形式を整えるのは必要最低限でよく、武芸や体力・知力の鍛錬に相応しい服装と家臣団の編成こそが、青年時代の最大の課題であつたと考えられる。つまり青年期の信長が考えるマスキュリニティーとは、自身の武芸・武略の鍛錬と、鉄砲や長鎗など新しい武器で武装した、より強力な家臣団の構築であつたといえる。

信長は道三との会見後、自分の兄や弟を次々に倒し、尾張一国を統一する。兄弟やそれに加担した重臣は抹殺したが、逆に信長に加担した林や柴田などの家臣は、もと信長の兄弟の家臣であつても、自らの

家臣団に加えてゐる。近隣の戦国大名と競うためには、こうした柔軟さが必要な時期だつたのであろう。

また湯帷子に茶筌髷で武芸と兵法の鍛錬に励むばかりでなく、「敦盛」を舞い小歌(室町小歌)を謡い、自ら天人の姿をして小鼓を打ち、「女をとり(踊り)」⁽¹⁶⁾を演じて見せたとあるから、はやりの歌舞伎踊りをやつて見せたのであろう。武田信玄に信長は「い異」な物をすかれ」⁽¹⁷⁾ののだなと言わせたように、信長には武将の常識を越えた自由さと進取の気風があつたのであろう。つまり信長のマスキュリニティーには、ごつごつした武将としての武芸と知性への渴望と共に、世間一般の男女が好むような性差を超えた芸能好きの側面も付け加えられていたことになる。

しかし戦国期の武士の常識は、舅道三と会見するような正式の場、また父親の葬儀の場のような儀礼の場では、髪を結い、長袴を着し、小刀を着けるといふ、相手を尊重し、威圧感を与えない服装・行動が礼儀に叶つたものであるとされていたこともわかつた。

2 壮年期の信長の容姿とその意義

永禄三年(一五六〇)五月、今川義元に勝利して以後、信長は浅井・朝倉を倒し、次いで足利義昭を追放し、武田軍を破り、天正四年(一五七六)安土城に移り、毛利氏と対決する傍ら、石山本願寺を下して畿内の制圧にも成功する。こうして強敵としては中国方面の毛利氏のみを残していた天正九年、信長はこの年のうちに四度もの馬揃えを行っている。その中でも最も盛儀であつた二月二十八日の京での馬揃え

と八月の安土での馬揃えについて、信長の出で立ちを中心に検討してみよう。

京での馬揃えに先立つ正月八日に、信長は安土で小姓や馬廻衆を従えて馬揃えを行い、近衛殿・伊勢兵庫頭や織田一族も加わって、湖畔の馬場から城下までの騎馬の行進を行った。その時の信長の装束は、黒の南蛮笠を被り、赤色の「ほうこう」(ほうこ・布袴・布製の括り袴)に、唐錦の「そばつぎ」(合戦時鎧の上に羽織る袖無し脇開けで前後の裾を金襴でつないだ上着)を着て、虎皮の行腰(むかばき・腰から足をおおう布や皮)を着けていた。⁽¹⁷⁾ 南蛮傘を取り入れた信長の姿は、唐錦(唐織りの錦)のような高級舶来織物や赤い袴と組み合わせられているため、当時の人々にとっては、新しい物好きだがその反面珍奇な服装にも見えただろう。

二月二十八日には、五畿内・諸国の大名・小名・御家人を召し寄せ、駿馬を集めて盛大な馬揃えが行われた。内裏の東側に八町の馬場を設営し、正親町天皇以下公家衆が見物する棧敷を設け、丹羽長秀と摂津・若狭衆・西岡の革島氏を先頭に大々的な騎馬武者の行進が始まった。信長は錦紗のほうこ(布袴)に頭には頭巾、後に花を立て高砂大夫の出で立ちであろうか、梅花を首に挿し、小袖は二種で、下の小袖は紅梅に白の段々(縞)で、桐唐草の模様があった。上の小袖は長岡(細川)忠興に捜し求めさせた「蜀江の錦」で作った小袖であり、袖口は金糸で縁取りをしてあるという珍品である。そして肩衣は紅緞子で桐唐草、袴も同前であって、腰には牡丹の作り花を挿していた。この造花は天皇家から贈られたものであるという。そして腰簑は白熊、鬘斗付きの

太刀・はきそえ(小太刀)で腰に鞭を挿し、弓懸(ゆかけ・弓を射る時の革の手袋)は白革で桐の紋があり、沓は「猩々皮」(オレンジウータンの毛皮)で、「たちあがり」(裁ち目のこと)は唐錦⁽¹⁸⁾であった。

信長のこの日の装束は素材の点で、当時の最も貴重な文化財とも言うべき、奈良時代に蜀から伝来した三巻の錦のうちの一卷を小袖に仕立てたり、緞子、錦紗や唐錦を惜しげもなく使っていることがわかる。緞子は室町期に中国から輸入された練糸で作られた地厚の絹織物であり、錦紗は『信長公記』に昔唐土か天竺で天子のために織り出されたもので、四方に織り止めがあつて、真ん中に人形を織り付けた高級織物で、このたび「能(わざ)と織られたものらしい」⁽¹⁹⁾と記される新しい織物である。また装束の色は錦紗の金の糸や袖口の金糸、赤と白という、光り輝きよく目立つ衣装であつたことがわかる。信長は武人として腰簑や太刀、弓懸、沓を着けているが、花を挿し、高砂大夫の出で立ちをも意識しているという、統一のとれない格好であつた。しかし織田家の家紋である桐は弓懸や小袖に示しており、当代に手にすることが可能な限りの豪華な素材を衣装に仕立てており、まさに織田信長が公武のみならず天皇家を凌駕するほどの「天下人」の地位に在ることを天下に示したのが、この信長の出で立ちであつたと考ええる。

従つた信長の家臣たちも「我劣らじ」と手を尽くして、「薄絵」(摺箔のこと・金箔・銀箔を糊などで生地に着させ、文様を表現した織物)、唐織物(舶来の織物)、金襴綾、縹子、羅などの縦糸に紙に金箔を貼って細く切った金糸を折り込み文様を表した織物)、唐綾、狂文(種々の模様を織り交ぜたもの)を上着や袴にし、足袋、草履、馬具まで飾り立てていた。

特に金欄は天正年間に中国の工人が堺に来て、技を伝えたと言われるので、輸入品を珍重していた時代から一步自国生産へと踏み出す転換期の所産であり、まさに技術が日本に伝来されたばかりの豪華な織物であったことになる。(後掲画像参照)

これを見物した人々は、信長の出で立ちに「住吉明神の影向(ようごう・来臨・一時姿を現すこと)もかくや」と思ったほどで、神を感じたという。信長を神のこの世への示現ととらえている。信長が目論んだ「天下人」として人々の上に君臨するという目的は、この日達成されたといえる。

馬揃えを見物した「貴賤群衆の輩」は「かゝる目出たき御代に合(あ)い」「天下泰平にして」「生前の思ひ出」「有りがたき次第」であり、「上古・末代」にもない、きわめて珍しいすばらしい機会に巡り会ったものだと思いつつ見物したという。

天皇の「御歡喜」は斜めならず、信長の面目も数えられないくらい上がった。晩に信長が本能寺に帰ってきたとき、『信長公記』は「千秋万歳、珍重々々」とこの日の記事を結んでいる。⁽²²⁾

その後、天皇の望みによって三月五日にまた馬揃えが催され、この時は先の二月の馬揃えの中の名馬五百余騎を選んで行進させている。

三月の馬揃えの時の信長の装束は、黒い笠に黒のほうこ(布袴)、公卿や大納言が着る黒の道服に太刀を付け腰簪を付けるという、黒ずくめの装いであった。三月に行進した馬は五百余騎で、二月の馬揃え中の名馬を選んで出演させていることから、二月の馬揃えには、千騎、千五百騎、あるいは二千騎もの騎馬の行進があったと推測される。信長

の「御威光」を輝かせるには馬揃えは格好の催しであった。

八月朔日、信長はこの年四度目の馬揃えを安土で行っている。夏の馬揃えであったためであろう、信長は白い装束に統一して臨んでいる。白の笠とほうこ、虎皮の行膝を付け、葦毛の馬に乗るといふ馬も白を基調にした出で立ちであったことがわかる。近衛殿や一門衆は下に白の帷子を着て、上には生絹(すずし)の帷子あるいは辻が花染め(白地に藍と紅で一面に葉と花を染めた夏の着物)を着し、袴は金欄、綴子、縫物、蒔絵など色々であったという。⁽²⁴⁾辻が花は、室町期寛正年間から記録に見え、この最初の辻が花の衣装(帷子)は、伊勢氏が八月に催された大追物の際に着用しているの⁽²⁵⁾で、戦国期には武士階級も広く手に入れることができるようになった夏用の高級染め物であったことになる。こ⁽²⁶⁾こでも武将たちは、当代の新しい最高級の織物を身に付けて行進したことがわかる。

天正九年の信長の馬揃えの実態とそれに対する世間の評価は右のようなものであった。二月二八日の天皇以下、公家から庶民にいたるまで大勢の人が見物した馬揃えは、「天下泰平」の証として、人々の胸に刻まれた。「天下布武」を目指した信長の、武力による平和ではあったが、天皇以下庶民には和平・平安な状態をもたらした権力として歓迎されたのである。

馬揃えの際の信長以下大名・武将・重臣たちの出で立ちには、蜀江の錦のような文化財・貴重品を除いて、鎌倉期に伝来し、この直後に京を中心に織り始められた金欄のような新進の豪華織物や、伝統的に高級技術としてもてはやされていた刺繍(縫物)、それに新しく日本

で室町期に誕生した染色技術としての「辻が花染」など、当代の最高級品が馬揃えに登場していることがわかる。

中でも金襴は、舶来物は以前から袈裟などに仕立てられていたが、南北朝期に千種忠顕や文観僧正が直垂などに仕立てて着ており、武士階級にも浸透しはじめていたことが知られる舶来の高級織物である。

信長の死後秀吉時代になると、文禄元年（一五九二）三月六日条に「洛下町人錦襴一尺余献之。蓋始而織出云々。各々奇之。吾朝如此之事未聞之。」⁽²⁶⁾とあるので、天正年間に堺に伝えられた織成技術が、京都に伝えられ、文禄元年には、西陣での自力生産がまさにはじまろうとしていた段階であったことがわかる。また馬揃えの翌年正月に信長が着ていた着物は「京染」の小袖であったとあるので、辻が花染など京都で専ら生産された新しい染物は、「京染」と総称される高級染物としての評判が確立し始めていたことも知られる。天正期、織物と染物で京都は別格の高級品生産を誇り始めていたことがわかる。

こうした舶来品、日本での生産品を問わず、染め織り刺繍の最高級技術によって生み出された衣服を、信長以下の男性が身につけ、しかも武将として行賧や沓、手袋に獣皮を用いて武人であることを表す一方、能の装束を加味したり、花を挿すなど、文化的側面や女性的優しさまで取り込んだ、武と文を融合させた豪華絢爛さが、信長壮年期の權威の表し方であったといえる。信長壮年期の馬揃えに見られる騎馬武者の姿は、まさに信長時代のマスキュリニティーであり、舶来あるいは自国生産が始まったばかりの珍奇な高級品を、権力によって獲得することができるという、まさに權威の象徴でもあったと考える。

こうした高級織物を信長以下の武将が着用したことが、京で永正十年（一五一三）に綾織物生産の独占権を獲得していた西陣の職人たちや、天文年間に「上様被官」の地位を得ていた大舎人座の座衆三十一人などを活気づけたと考える。天正年間堺に伝えられた金襴が、秀吉時代に「洛下町人」によって国内で生産されはじめたのは、西陣の町人による金襴生産を指しているとしてよからう。やがて金襴が中国産を圧倒する時代はもう目の前に迫っていた。緞子も天正年間に堺に技術が伝えられ、西陣に導入されたともいわれている。⁽²⁷⁾

信長壮年期の馬揃えの挙行は、青年期の「武将」、あるいは青年戦国大名としての、派手で奇抜ではあるが実質を重んじた衣装とは異なり、「天下人」として、また公武・庶民の上に君臨する支配者として、可能な限りの豪華絢爛な衣装を纏い、自らの力と權威を見せつけるための演出であったと考える。これが信長の天下に示したかったマスキュリニティーであったと思う。

二 重臣が見る武将像

1 『甲陽軍鑑』が語るあるべき武将の姿

『甲陽軍鑑』⁽²⁸⁾は江戸時代元和年間に成立した武道の書である。江戸幕府初期のまだ戦国の気風が色濃く残っていた時代に成立した本書は、減び去った武田家の、最も勢いのあった時代すなわち武田信玄時代の重臣小幡景憲あるいは高坂虎綱が編纂したと考えられており、武田信

玄時代から勝頼時代にかけての織田信長や徳川家康、毛利元就、古河公方足利氏や関東管領上杉氏また北条氏など戦国期から織豊政権期の武將の行動や施策、合戦の仕方などを論評した書である。一つ一つの事実については、記憶の誤りもあるが、武田氏の重臣から見た時代批評となっている点は、他の史料にない価値を持っていると考える。

『甲陽軍鑑』は男女一般について、その違いを明確に述べており、男には男道つまり男子として踏み行うべき正道があるとし、人間としての生き方の正道とはと正道論を展開するのに対し、女を「女人」として一般化したのち、女人はほとんどの人は理を知らず、理を知っている女でも男の分別には劣る存在、至らぬ存在だと、男より一段低い人間に分類している。⁽²⁹⁾ そうした上で、彼らが仕える武將(戦国大名)の品定めをして、大將に四種があると述べるのである。

第一は「鈍すぎたる大將、馬鹿なる大將」⁽³⁰⁾で、具体的には今川義元を想定している。現在の日本史研究では今川氏は東国戦国大名中最も早く分国法を制定し、「公事検地」を実施して領国統治に努力した東国戦国大名の代表であるとされるが、『甲陽軍鑑』の記述は一昔前の今川氏に対する評価に似ていることは興味深い。

第二は「利根すぎたる大將」⁽³¹⁾で、「行儀」がよくなく、色を好む大將であるとし、武田信玄の長子義信をあげている。そのような大將は無分別、無穿鑿ゆえに諸人から恨みを受ける、とも述べる。「みょうご(唐牛)」という牛には尾に剣があり、自分の尾を舐めると出血するがその塩味を好み、つねに尾を舐めたがる牛のことだという。義信は父信玄に敵対し、あるいは咎もない家老を切りたがり、ついには我が

身を亡ぼしたのがそのよい例だとするのである。

第三は「臆病なる大將」「弱すぎたる大將」⁽³²⁾で、これは、「女の如し」と決めつける。諂う人(へつこ)を愛し、外聞を気にし、義理をないがしろにするとし、上杉憲政がこの実例だとする。

第四は、「強過ぎたる大將」⁽³³⁾で、心武く、機走り、弁舌は明らかで弱みを嫌う大將である。ここまでは申し分のない資質であるが、このような大將は多くの人を死なせるという弱点を持つ。第四の大將に該当するのは、織田信長と武田勝頼であるとする。武田氏は勝頼の代に滅亡したという事実がここに反映していると思われる。しかし武田勝頼を、「強過ぎたる大將」として武將のうちでも最も優れた素質を持つ人と見ていることも注目される。

織田信長に関しては「強過ぎたる大將」の筆頭に挙げており、武田氏は勝頼代に信長に亡ぼされたにもかかわらず、信長の智謀や武術、戦略の見事さを讃えていることも注目される。また、武士全般について『甲陽軍鑑』は国持(弓矢取)、侍大將(武篇者)、小身(兵)に分類し、最上級の国持について、合戦の場数を踏んで多くの城を取るだけでなく、文を嗜み、人を知りうまく使いこなす大將こそが「文武二道の弓取」であり、「名大將」というのだとしている。⁽³⁴⁾ そして、織田信長は「国持の異相人」⁽³⁵⁾だとも述べている。国持の大名であるが「異相」の人だったというのである。この場合の異相とは、「すぐれて心清く」、刀・脇差しが人間に変身したような人で、武士道の役に立つ人である、という意味であり、信長や穴山信君(梅雪。信玄の姉の子で、信玄の娘見性院の夫などがそれに当たるとする。つまり強すぎる点を除けば、信

長は理想的な文武を兼ね備えた「名大将」であり、優れた国持大名である、と『甲陽軍鑑』で評価されていたことになる。高坂弾正など武田家重臣にとって、最も優れた武将・大名は織田信長であつたといえる。武田家にとっては好敵手であり、天正十年にその信長に亡ぼされてしまうことになるのだが、当時の日本の各地にいる武将や大名たちをよく観察し、品定めをし、それをまた後輩たちに語って聞かせることによって、領国の今後を支えることになる次世代を育成しようという気風が、『甲陽軍鑑』から見て取れる。そのためには武将の評価は公平でなければ説得性が薄れる。こうした公平な重臣からの評価で、最高位を得たのが、信玄亡き後は、織田信長であつたといえる。

2 武田氏領国の女性観

『甲陽軍鑑』には女性に関する記述がかなりある。この記述には戦国期から織豊政権期の武士特に重臣達の女性観があらわれていると考えられる。マスキュリニティーと女性観は対立するものなのか、一部包含されるものなのかを、『甲陽軍鑑』を通じて考察してみる。

『甲陽軍鑑』冒頭(品第二)には高坂弾正の語つた家中侍の「作法」とすべき条項が並べられている。屋形様(武田氏)に対し逆意あるべからざること、武勇を専ら嗜むべきこと、父母に対し不孝してはならない、僧・童女・貧者についてはより一層「慇懃」にすべきこと、家中の郎従に対し慈悲が肝要であることなどが述べられたあと、嫉妬の咎は堅く申し付けるべきこと、それに「毎時油断すべからざる事」⁽³⁶⁾の一条がある。油断とは武士の日常生活において刀を忘れるべきではなく、

風呂に入る時も顔や両手の垢を他人に取らせてはいけなとする心得である。

ここで注目されるのは、この「油断大敵」の論拠であり、その論拠として論語の「吾 日に三たび吾が身を省みる」とある点に求めているのは是認できるが、「付り」として、「縦い夫婦一所に在りと雖も、聊か刀を忘るべからざる事」を付加している点である。「付り」部分は戦国期の男性武士に対する教えであり、戦国期の女性に対する男性武士の見方・心得はこれであつたことがわかる。武士の男性は女性一般に対して油断すべきでなく、夫婦で寝所にあつても刀を忘れるべきでない。いつ妻が敵になり、寝首を掻かれるかわからないので、妻となつた人でも油断するなという教訓であると考ええる。この部分からは、武士の女性、商人や芸能者の女性を問わず、女性も一個の人間として、夫の寝首を掻くほどの行為に及ぶ場合があること、つまり女性も武力を行使する存在であり、油断のならない存在であることが示されていると思う。

その証拠に「妻への油断大敵」を論じた後に、剣術では「殺人刀」と「活人剣」があるとし、また「風呂において顔並びに両手の垢は、人(他人)に取らすべきでない」と記すからである。風呂など日常生活において武士はいつも油断すべきでないと教訓していることがわかる。その中で第一に挙げられるのが妻への警戒心であることは、戦国時代の武士階級の夫婦関係が、妻を一個の人間として捉え、夫にさえ敵対しうる強敵として認識されていたことを示している。

ここで想定されている夫に斬りつけるおそれのある妻とは、「品四

十」に類出する「女侍」に分類される女性であらう。しかし「女侍」について、武田信玄やその言を書き記した重臣たちは、否定的な見方をしている。女侍とは、信玄によれば自分の臍^{ひき}を褒める侍で、また「劣りをましといい、ましを劣りという」ような「かざる」男の侍を「女侍」というとする⁽³⁷⁾。重臣たちは、武士の作法を知らない侍、臍病な侍を「女の如し」と述べる。つまり女性の侍(武士)が妻となつて存在することは肯定しつつも、武士の作法を知らなかったり、臍病であったり、臍病したり、実物よりもおおげさにはめそやすような男の侍を、「女侍」として見下し、手本とすべきでないとしたのである。

女侍のこうした良くない性質は、武士階級の女性だけでなく、女性一般にみられる悪徳でもあると、『甲陽軍鑑』は述べる⁽³⁸⁾。女とは、臍病で弱すぎ、そねみ、いやしみ、人のまねをし、またかざる存在であるという。女性一般と女の侍に差はない。女性はある階級が、男性武士にとって、等しく手本にすべき存在ではないと見られていたことがわかる。

このように考察を深めてくると、「臍病な大将」「弱すぎる大将」(具体的には上杉憲政)が「女の如し」といわれた理由が納得できる。武田信玄やその重臣たちは、武士階級の女性を含めた女性一般について、男性武士の見習うべき対象ではないと切り捨てていることがわかる。

しかし女性に対する警戒心は旺盛である。恵林寺の快川紹喜は「鳥の子を十ツ十はかさぬ共、女に心許すべからず⁽³⁹⁾」の歌を残している。これは百回契ったとしても、女に心を許すな、という意味で、先述の「夫婦一所に在りといえども、聊か刀を忘るべからず」と同じ意味で

ある。女性一般への警戒心は武田領国では旺盛であったといえる。女侍は見習う対象ではないが、寝首を掻かれるのを心配しなければならぬ。女性一般は男性よりも劣った属性をもつから、手本とはすべきでないが、女性の武士がいることは認めており、彼女らを含む女性特に妻は警戒すべき対象であった。男性武士のマスキュリニティーにとつて、女性は劣つてはいるが、侮れない意識と行動を持つ存在であったと考えていたことがわかる。

戦国期の戦国大名の重臣層は、「強すぎたる大将」よりは一步手前的大将を、最もよい主君と考えており、そうした大将や家臣団にとつて、女性一般は男性よりも劣った属性をもつから、手本とはすべきでないが、女性の武士がいることは認めており、彼女らを含む女性特に妻は警戒すべき対象であった。男性武士のマスキュリニティーにとつて、女性は劣つてはいるが、侮れない意識と行動を持つ存在であったと考えていたことがわかる。

次に主君信玄と重臣の意見が対立したとき、また妻を離婚する場合の武士の考え方について検討する。上野国峰城に拠る小幡信貞という武士と信玄の発言がここでの史料となる。

小幡信貞は相^{あいに}婿の小幡図書助に国峰の城を追われ、浪人して信玄を頼つたが、後国峰に帰った人である。そしてこの信貞は上野箕輪城主長野業正の婿であつた。つまり妻を長野家から迎えていたのである。長野業正は弘治三年(一五五七)信玄と取り合い、七年間楯突き、永禄六年(一五六三)箕輪城は落城、長野一党は信玄によつて退治された。その後小幡信貞は甲府に召し寄せられ、信玄から「きつと女房を離別されたい、武田家の譜代衆の中で縁辺を結ばせる」と、原・内藤両重臣をもつて仰せがあつた。

これに対する小幡の返事は、このことを長野氏の御誅罰以前に仰せ下されたならば上意に従ったことでしよう、その理由は自分は上杉憲政をうらみ、景虎に憎まれ、討たれようとしたとき、甲府へ走り、信玄の扶持を得て、信州日向で五千貫文の領地を頂き、その後本領である国峰城に帰ることができたのは、偏に信玄公の御恩に他ならない。

しかしこの女房は旧妻で、どこへも参るところがなく、「女房落所なく流浪いたすならば、旧妻の恥悉皆小幡上総(信貞)が悪名にて候間、御成敗はあるとも此女房にをひては離別申間敷⁽⁴⁰⁾」であった。つまり、妻の恥は夫の悪名であるというものであり、妻を離別して路頭に迷わせれば夫の名誉に関わると考えていることがわかる。生家の無くなった妻を離別することは、夫に取って恥であるというのであるから、妻の生家がたとえ夫の家と敵味方に分かれても、それぞれの家が存続している限り離婚も可能だが、家がなくなった段階では離婚すべきではない、というのが、戦国期の武士の考えであったことになる。

この小幡の返答に対して、信玄は「大義理の正しき道に免じて許す」と述べている。主君の離婚指示に従わなかった小幡をほめ、その上信玄の甥信豊を小幡信貞の婿にしている。つまり信玄も家臣小幡信貞も、妻の実家の存否が離婚に際しての大きな要件になっていると考えていたことがわかる。離婚という事態の後にどういうことが生じるのかそこまで考えて離婚に踏み切ることこそが、道理に適った態度であると考えたことがわかる。妻は油断すべき相手ではなく、用心しなければならぬ相手ではあるが、婚姻したからには、相手の家に対する配慮や責任が伴うものであることがここでは示されている。妻は

夫の所有物で、夫の意のままに物のように捨てられるものだと、戦国期の主君も家臣も考えてはいなかったのである。妻は出自の家を背負う存在であり、その点では夫と同じ立場にあった。

家臣の離婚については、信玄主従の意見は一致した。しかし信玄と重臣の意見が食い違った件がある。それが「喧嘩両成敗法」についてである。

武田信玄は天文十六年(一五四七)甲州法度五十七条の「式目」を制定した。『甲陽軍鑑』によれば、信玄二十七歳の年であったという。その十七条に、喧嘩した者は「理非によらず」双方を武田氏が成敗するとある。これを触れるようにと信玄が長坂・跡部・原・駒井の四宿老に命じたところ、宿老の評議で、内藤修理が反対したという。内藤は何事も堪忍するようにとの上意ならば一見無事に見えるが、それは武田家にとっては大きな損である、その故は、何事も無事ということになれば、諸侍は「男道のきつかけをばづし、皆不足を堪忍仕る臆病者になり候はん」、つまり結局は武田家のために悪いということになる、と述べている。⁽⁴¹⁾他国では弓矢の嗜みを専らにしている時代に、武田家だけが喧嘩をするなといい、男道を失うのはもったいないことであり、自分だけでも堪忍せよとは申し付けられないこととまで述べている。武田家臣団の中に、甲州法度十七条の喧嘩両成敗規定に異論があり、それを堂々と開陳し、自分だけでも「堪忍」することを家臣に申し付けたいと述べる重臣があつたことが注目される。戦国国家法が一旦定立されても家臣団内部の受け留め方にはかなりの偏差があつたことが知られる。戦国大名の家法は領国の基準法ではあるが、家臣

がそれを守りそれに従うかどうかにはまだまだ自由度があつたといえる。

したがって主君のマスキュリニティーについても、織田信長を「強すぎたる大将」と評したように、家臣なりの「評価基準」があつたと考えたい。その基準とは道理に明るく、才気に溢れ、行儀もよく、弁舌も明らかで、弱みを嫌う武将であるというものであつた。したがって信長の青年期の姿は武田氏の重臣たちには心清いという意味での「異相」として受け入れられるが、晩年の豪華な姿ではなく、領国主らしい、飾らない節度ある姿が、重臣たちの思い描く「大将」としてのマスキュリニティーであつたと考える。信長の示した「外形的」に豪華なマスキュリニティーは、家臣たちには評価できないマスキュリニティーであつたのである。

重臣たちの考える理想の主君・理想の家臣団の姿を語る史料としてもう一つ注目されるものがある。それは『太閤記』⁽⁴⁾に登場する、信長十六歳の時の織田家の四家老(林・青山・平手・内藤)の信長に対する諫言の内容である。これら四家老は信長の父信秀から付けられた家老たちで、多くの国守の行いについて語って信長を諫めたところなので、信長青年期の異装を改めさせようと、重臣たちは信玄や謙信の行いについて語り聞かせたのである。その中に「信玄の制法」がある。制法のうちの一、三、五条を引用してみる。

- 一、万事儉約を守り、驕を去り、士の気味を嗜み申すべきこと。
- 三、妻子の衣類、一万石所持の士は京染めの小袖、五千石より下は薄板(唐織の薄手のもの)、五百石より下は紬(平織の丈夫な絹織物)、

百石内外は布子(麻布の衾または綿入れ)たるべきこと。

五、親族の間一年の内、振る舞いの儀は二度、二汁三菜の外、停止すべきこと。

信長の重臣たちは信玄の制法(信玄の出した法度)が最も戦国期の理になつたものとして、そこに書かれた条文を信長への諫めとして引用したのである。ここにおいて、信長の重臣たちも、信玄の重臣と同様の主君像を理想の主君として描いていたことがわかる。

主君は儉約を守り、奢侈に陥らず、武士の気風を嗜むべきこと、家臣の妻子の衣類についても、石高の多少によって、京染の小袖、薄板、紬、布子と、身分の違いを衣類で明示すべきであるとしていることがわかる。薄板よりも京染の小袖が上位の家臣の妻子の衣類としてあがつている点から、信長青年期にはまだ金襴・緞子などの舶来織物は殆ど輸入されてはおらず、家臣クラスの妻子は最上層の家臣の妻であっても、京染の小袖を着るのが最も平均的な装い方であつたことがわかる。信長自身も「天下人」となつてはじめて、天正九年の馬揃えのような豪華な衣装を手に入れることができたのであろう。

三 豊臣秀吉時代のマスキュリニティー

豊臣秀吉が世間に示したマスキュリニティーについては、『太閤記』などを用いて考察する。

慶長元年(一五九六)九月一日、前年の一月に北京を出発した明の使者が大坂に到着した。文禄の役の終結については、秀吉は小西行長の

家臣内藤如安らを駆使して講和交渉をしていたが、これがまとも、秀吉への献上品を持って明の正使・副使が日本を訪れたためである。

秀吉は大坂城千畳敷で明使と対面し、その後伏見城へ使節を案内している。会談自体は秀吉が明の国書の内容に怒り、朝鮮への再出兵を命じたことで有名なものであるが、この時明使が「大明皇帝」より秀吉への献上品として持参した品物が興味を引く。生物として孔雀、麝香^{じやこう}、鹿^{じか}、白象、黒象、馬、唐犬を携え、織物としては金襴百卷、緞子百卷、綾百反、錦五十卷、縐子二百卷、早綾^{さや}二百卷という大量の高級織物が見えるのである。その他に虎の皮三十枚、豹の皮三十枚、「唐皮」（オランダ舶来の文様のある皮）三十枚、青皮^{せいひ}馬の皮三十枚、猩々（オランダウータン）皮三十枚が献上された。毛皮も多様でまた枚数も多いが、なんとについても織物の種類とその量の多さは圧巻である。金襴と緞子はいずれも南北朝期の『太平記』⁽⁴³⁾に見えるから、それ以前より日本に輸入されて珍重された織物であり、そのうちの金襴は先述のように室町末以後日本でも織られ始め、緞子は遅れて織られ始め、近世には専ら帯や羽織表・袋物に加工されることになる。綾は日本でも室町時代には大舍人座の人々によって織り出され、「大舍人の綾」と『庭訓往来』に記されるほど有名になっていた。しかし応仁・文明の乱の影響で織手が堺や奈良に避難し、堺で明渡来の技術に触れた織手たちは、乱後帰京して西陣跡の大宮辺に住んで織物生産を再開し、天文ごろには、白雲に住む練貫座衆と製品についての争論も起こすほどになっている。練貫座は平絹の綾織物を産出していたからである。そこで大舍人座衆は争論を有利に導くため、「大舍人方座中衆」三十一人が「上

様（室町將軍家正室）御被官」となることによって特権的地位を強化しようとする。大舍人座は本所万里小路家や祇園社に課役を勤めていたが、その上に加えて將軍家御台所の興添え役などを勤めることで、特権の生産・販売権を守ろうとしたのである。大舍人座衆は天文ごろには明から輸入した白糸を材料に綾を織り出していたとみてよからう。⁽⁴⁴⁾この三十一人は西陣を代表する人々である。もとはといえば明から学んだ技術ではあるが、戦国期には西陣織物を代表する綾織物や厚板物を生産していたのである。

つまり永正ごろより日本国内で生産されはじめた綾や金襴、緞子、縐子などの手本となる明の織物が、大量に秀吉の元に献上されたのである。これが国内特に西陣の高級織物生産の発展・進歩に影響を与えたことは間違いないだろう。秀吉への献上品が西陣の職人たちのものに届けられたという確証はないが、同年同月土佐に漂着したサン・フェリペ号の積荷の織物は町人にも分け与えられている。

その詳細は以下の通りである。

南蛮からノビスパン（現在のメキシコ）へ向かっていたイスパニア船サン・フェリペ号が難破し、船体修理のため土佐浦戸に九月八日に入港した。土佐の領国主長宗我部氏は大坂城の秀吉に報告、秀吉は増田長盛を派遣、臨検した長盛は船荷と乗組員の所持金を没収させ、十月それは大坂に着いた。積荷の一覧は次の通りである。

上々の縐子およそ五万反 唐木綿二六万反
金襴・緞子五万反 白糸一六万斤
みんす（印子金）一五〇〇 麝香箱一但二人持

生きてゐる麝香(鹿)一〇 生きてゐる猿一五
鸚鵡二おうち

秀吉はこのうち禁中へ鸚鵡一羽と二人持の麝香箱一、それに金欄・緞子二万反を献上した。次にこの品を公家衆から馬廻、中間に至るまで配分し、「京・堺、大坂、奈良の町人などにも下さる」とあるので、京・堺・大坂・奈良の町人で織物を扱う町人たちにも、明の木綿や繻子、金欄・緞子、それに白糸が分け与えられたと考えて良い。つまり慶長元年九月に土佐に漂着したイスパニアの商船サン・フェリペ号の積荷の織物は、それが大量であつたが故に、町人や職人の手許にも渡り、以後の日本の織物生産の発展に繋がつたと考ええる。それにしてもルソン島からメキシコを目指していたイスパニア船が、いかに大量の中国産織物や純金を欧米に持ち帰ろうとしていたかが知られて興味深い。⁽⁴⁶⁾

秀吉は信長生存中の天正九年十二月、姫路城から安土城の信長の元に、歳暮の礼に参上した。その時の信長への贈り物は太刀(国久)一腰、銀子千枚、小袖百、鞍置馬十疋、播磨名産杉原紙三百束、なめし皮二百枚、明石干鯛千、野里産鑄物色々、蜘蛛三千疋、いずれも台に据えて進上したので、安土城の広間に入りきらず庭にゐるいと置かれる始末であつたという。その他に信長の一族妻子に対し銀子三百枚と小袖をそれぞれ台に積み並べ進上したという。⁽⁴⁷⁾膨大な量の贈り物である。しかしこの段階の進上物は銀子と小袖と播州の特産物であつたことが明らかである。鉱物資源としては銀であり、衣装としては小袖が最も高級な品物であつたことになる。

それから四年後の天正十三年になると、様相は少し変化する。信長の死(天正十年)、清須会議(同年)、小牧・長久手合戦(十二年)を経た天正十三年の初秋のころ、秀吉は大村由己の意見を容れて、御蔵入領二百万石余から集められた金銀米銭を「諸侯大夫等」つまり家臣たちに分け与えた。与えたものは金子五千枚、銀子三万枚で、聚楽第の惣門の南のかたで台に据え並べ「御くばり」(分配)があり、朝から晩までかつたという。⁽⁴⁸⁾

直轄領二百万石から集められた金銀を家臣たちに分配したこのイベントに対し、京童たちは、興ざめしつつも「古今に傑出し給へる君」だと評している。つまりここに秀吉の信じるマスキュリニティーがあると思う。持てる莫大な富を家臣に分け与えることで、秀吉は自己の男性性・男らしさまた権力を示そうとしたと考ええる。

秀吉の、手に入れたものは惜しげもなく天皇以下諸人に分配する、という精神は、先述の慶長元年の明からの献上品と黒船の船荷の分配に引き継がれていつた。秀吉のマスキュリニティーは、信長とは異なつた形で発現している。秀吉は蔵入地から上がる膨大な金銀米銭や到来物、収集品を集め所持していた。これは印子金(純金)、舶来の高級織物から珍獣に及んだ。これを、天皇以下家臣や一部は庶民にまで分配することによって、自分の富を誇示するとともに、天下人としての権力が自分一身にあることを示し、またこの秀吉の高級舶来織物の分与が、西陣を初めとする織物産業の進展を刺激したと考える。

おわりに

織田信長の青年期の茶筌髷などの「異相」は、織田家の重臣の眉をひそめさせる異様な風体であったが、後の『甲陽軍鑑』では良い意味での「異相」と捉えられており、信長自身も「強すぎる」点に難点は持ったものの、信玄に並ぶ「国持」（大名）と評価される立派な武将と考えられていた。その信長の本領が発揮されたのは天正九年の馬揃えの衣装・馬具であり、京染めの小袖や中国から輸入された高級織物を衣装に仕立て、見物衆をあつと驚かせるような豪華絢爛でまた文化的香りの高い衣装や馬具をまとうていた。これが信長が世間に見せたいと思った自身のマスキュリニティー（男性性）であると思う。手に入りにくい高級織物を惜しげもなく身に纏っている信長の姿は、信長の権威、財力や、能楽や小歌・「をどり」を好むという文化の香までを表出するものであった。『甲陽軍鑑』も肯定する「文武二道」を兼ね備えた武将の姿であったといえる。

これに対して戦国期から信長時代にかけての大名の重臣クラスの武士たちは、領国主（大名）たるものは奢侈に走ることなく、儉約に努め、身分によって衣装はそれ相応のものを着るべきだというものであった。家臣と主君との意識の違いが際立っている。信長が豪華絢爛な衣装に纏ったのは、こうした家臣の意見に拘泥されなくなった段階、天下人になった段階にはじめて、自らの男性性を表出できたからである。

豊臣秀吉がその男性性を披露しはじめるのは、信長の死後であり、天正十三年には金銀を家臣に、慶長元年には金襴、緞子、縐子、綾、唐木綿、紗耶（早綾）、白糸などを天皇家から摂家、清家そして馬廻、中間、町人に至るまで、広く分け与えるという方法で、自らの力と権威を示したのである。蔵入地からの莫大な収入の他、贈与品、輸入品として集めた珍奇なものや高級舶来品を所持していること、それを惜しげもなく配分することが、秀吉のマスキュリニティーであったと考ええる。

信長時代に、かつて伝来した文化財としての織物や近年輸入された高級舶来織物を見た京、堺、大坂・奈良などの織物職人たちは、秀吉時代にその一部分に触れたことで、国内機業（西陣機業や「奈良晒」など）は以後飛躍的に発展することになる。

信長・秀吉時代のマスキュリニティーは、武力・権力を集中して持つ男性の外形・衣装として現れる。その豪華な衣装を多くの人が見て、恩恵に与ること、その豪華な品物の価値は倍増する。その姿は富・富貴と権力の象徴であるのだが、そうした高級品を生産する意欲をかきたて、国内機業や純金の鑄造などの鉦工業の発展を促すという副産物を残したのであった。

注

- (1) 『信長公記』（『改訂信長公記』新人物往来社、一九六五年）。
- (2) 『信長公記』巻首。
- (3) 『信長公記』巻首。
- (4) 『信長公記』巻首。

- (5) 『信長公記』 卷首。
- (6) 『信長公記』 卷首。
- (7) 『信長公記』 卷首。
- (8) 『信長公記』 卷首。
- (9) 『信長公記』 卷首。
- (10) 田端泰子『山内一豊と千代』 岩波書店、二〇〇五年。
- (11) 『信長公記』 卷首に「さて、平手中務才覚にて、織田三郎信長を、斉藤山城道三卿に取り結び、道三が息女尾州へ呼び取り候ひき」とある。
- (12) 『信長公記』 卷首。
- (13) 『信長公記』 卷首。
- (14) 『信長公記』 卷首。
- (15) 『信長公記』 卷首。
- (16) 『信長公記』 卷首。
- (17) 『信長公記』 卷十四。
- (18) 『信長公記』 卷十四。
- (19) 『信長公記』 卷十四。
- (20) 小学館『日本歴史大事典』。
- (21) 『信長公記』 卷十四。
- (22) 『信長公記』 卷十四。
- (23) 『信長公記』 卷十四。
- (24) 『信長公記』 卷十四。
- (25) 『親元日記』 一(『増補続史料大成』 臨川書店、一九六七年)の寛正六年八月二十二日条に蜷川氏の主筋の伊勢氏の犬追物の際の衣装として「御かたひら(帷子)へに(紅)いらすの辻かはな」とあることによる。
- (26) 『鹿苑日録』 第三卷、続群書類従完成会、一九六四年。
- (27) 小学館『日本歴史大事典』。
- (28) 『甲陽軍鑑』 上・中・下(『戦国史料叢書』 3、人物往来社、一九六五—六六年)。
- (29) 『甲陽軍鑑』 品第七。
- (30) 『甲陽軍鑑』 品第十一。

- (31) 『甲陽軍鑑』 品第十二。
- (32) 『甲陽軍鑑』 品第十三。
- (33) 『甲陽軍鑑』 品第十四。
- (34) 『甲陽軍鑑』 品第四十上。
- (35) 『甲陽軍鑑』 品第四十上。
- (36) 『甲陽軍鑑』 品第二。
- (37) 『甲陽軍鑑』 品第四十上・下。
- (38) 『甲陽軍鑑』 品第四十上・下。
- (39) 『甲陽軍鑑』 品第四十下。
- (40) 『甲陽軍鑑』 品第四十下。
- (41) 『甲陽軍鑑』 品第十六。
- (42) 『太閤記』 上・下(小瀬甫庵著、桑田忠親校訂、『太閤記』 岩波書店、一九四三—四四年)。
- (43) 『太平記』(日本古典文学大系34『太平記』 岩波書店、一九六〇年)。
- (44) 『久我家文書』 一(國學院大学、一九八二年)。「久我家文書」五九二号の「大舍人本座中連署申状」によると、三十一人の座衆たちは、「練貫座」の如く「御輿副」の御供と「両季之御礼」を勤めるとしている。練貫座と大舍人座は、双方共に御台様の被官となることによってその特権を補完しようとしており、本来の勤めである織物生産以外に、金銭や現物の進上と共に、興添衆の一員としての従者奉公も勤めていたことがわかる。また三十一人の中に「馬」姓の者がいる。この馬姓の人々は室町期宝徳元年(一四四九)の文書に見える「大舍人之内大内坊西頼右馬孫三郎経信」の子孫ではないかと思われる。応仁・文明の乱の影響を受けつつも、大舍人座が復活していることが伺える。
- (45) 『太閤記』 下。
- (46) なおこの漂着船事件は、フランシスコ会宣教師、イエズス会士、日本人信徒合計二十六人の逮捕と処刑に発展した(『二十六聖人殉教事件』)。その原因はサン・フェリペ号の積荷没収の際、抗議した水先案内人が、スペイン国王の領土の大きさを世界地図で示し、国王は先ず宣教師を派遣して住民を懐柔し、その後軍隊を送って占領したと述べたことが、秀吉の



天正9年の馬揃えにおける信長の姿

(作画 阿部匡氏(本学卒業生))

『信長公記』に依拠した精密な再現画像である。

耳に聞こえ、宣教師への疑惑が高まったからという説、イエズス会とフランシスコ会士らスペイン系宣教師との対立が背景にあり、イエズス会の日本司教が秀吉にスペイン人を誹謗したのが原因との説がある。後サシ・フェリペ号の司令官は長崎を経てマニラに無事帰っており、秀吉は

積荷は没収したが、船の修理をさせ、要望の二倍の米、豚、鶏に酒・肴・うどん粉を加えて与え、船は三月初旬には帰国の途についた。

(47) 『信長公記』巻四十、『太閤記』上。

(48) 『太閤記』上。